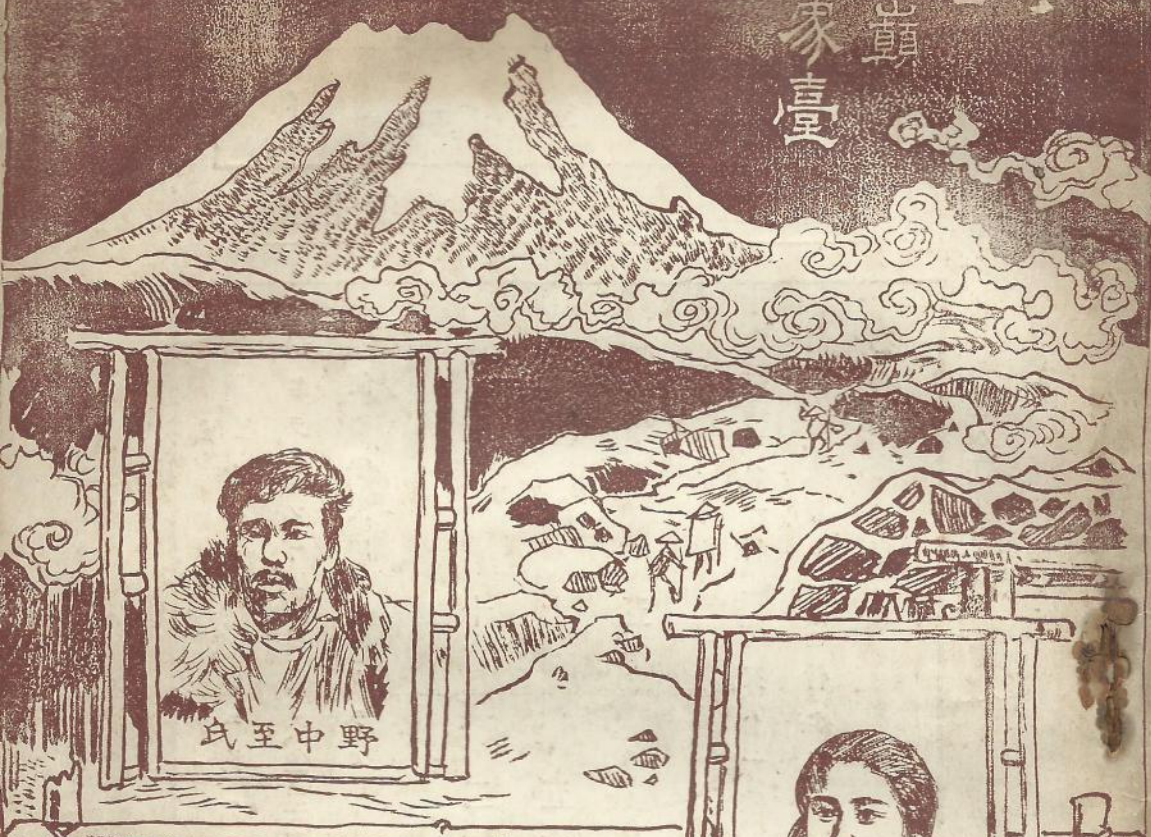


富士山巔
觀象臺



觀象臺設置費凡五十萬圓

- ▲新聞雜誌記者諸君ヨ、野中氏ノ大志ヲ贊成シテ此文ヲ貴紙ノ一隅ニ見ルノ榮ヲ與ヘヨ
- ▲學校ノ職員諸君ヨ、野中氏ノ熱望ヲ學生ニ語りテ、大ニ翼贊ノ意ヲ表セシメヨ
- ▲各宗ノ教師諸君ヨ、野中氏ノ義心ヲ聽衆ニ告ケテ、此美學ノタメニ喜捨セシメヨ
- ▲陸海將校諸君ヨ、野中氏ノ鐵腸ヲ幕下ノ將士ニ語りテ、此學界ノ累將ヲ扶助セシメヨ
- ▲實業家諸君ヨ、公共ノ爲メニ其肩ヲ抛ントスル野中氏ノ義膽ニ向テ盛ントスル贊意ヲ表セヨ
- ▲天下ノ紳士淑女諸君ヨ、野中氏夫妻ノ義學ヲ贊助シテ、芳志ヲ富岳ノ巔ニ冠セシメヨ



野中千代子

新聞雜誌
原稿

代筆寫

非賣品

轉載勝手

寄 附 金 注 意

富 士 觀 象 臺 設 置 費 凡 五 十 萬 圓

寄附金ハ決シテ多少ニ拘ハラザル故、便宜御申合セ續々義捐セラレシコトヲ希望ス、金三圓以内ノ分ハ二錢又ハ三錢ノ郵便切手代用苦シカラズ

五 錢、十 錢、二十錢、五十錢、可ナリ

壹 圓、十 圓、五十圓、百 圓、尙可ナリ

千 圓、五千圓、壹萬圓、尙更ニ可ナリ

寄附金ハ一村、一町、又ハ一校、一隊、又ハ一廳、一會社、一工場、等便宜取り纏メテ送付セラル、モ或ハ各廻送セラル、モ御都合次第ノ事

編 者 白

送金先キハ

東京小石川原町五十五番地

富 士 觀 象 會

(新聞雜誌原稿)
轉載抄錄隨意

富士山巔の觀象臺

松島 剛

此文を讀まん人々は、務めて此事を多くの人に吹聴し、又は新聞雜誌に掲載して、間接に觀象會の事業を扶助せられんことを請ふ

緒言

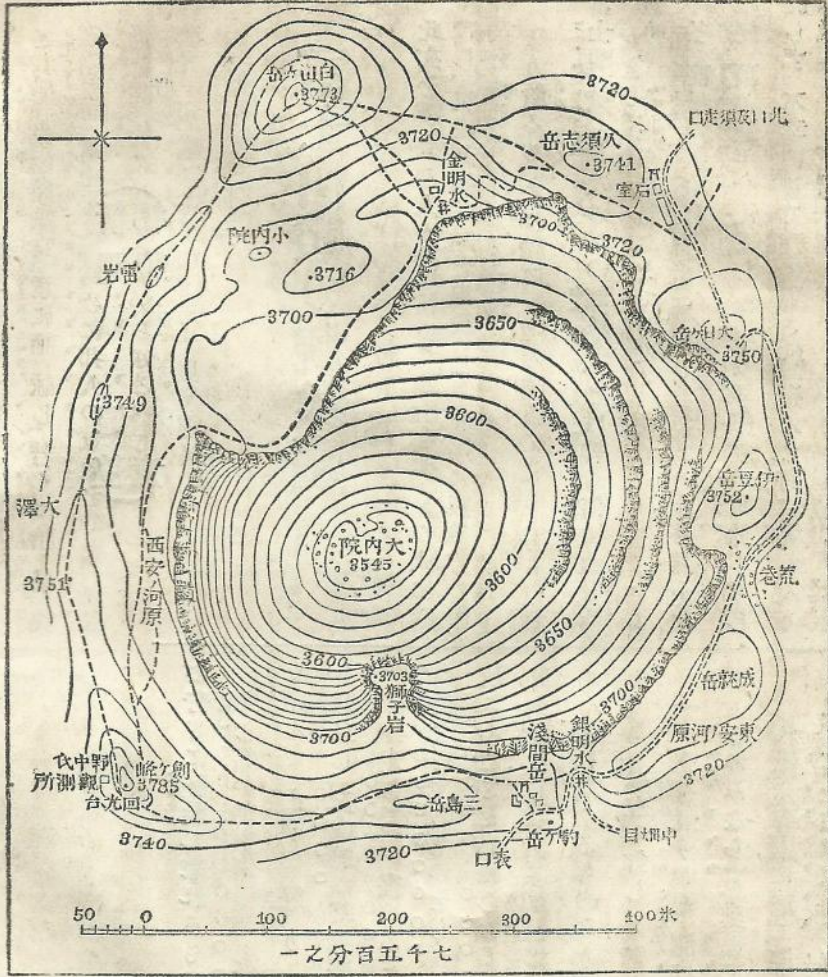
富士觀象會なるもの起れり、こは抑も何に由りて起れりや、今更らに言ふまでもなく、去ぬる明治二十八年の冬、高層の氣象を觀測せんと希望にて、單身富士山の絶頂に越年せんとし、健氣なる細君の幫助ありしに關らず、不幸にして疾に犯され、殆んど將に斃れんとし、恨を吞んで下山したる、彼の野中至君の堅志と忠實

の行とに胚胎し來れるものなり。

蓋し君が斯事業志してより、茲に十餘年、或は氷雪を踏んで、山巔に攀り、又或は私財を抛ちて、觀測所を建立し、又或時は終夜寝ねずして沈思し、又或時は東西に奔走して計畫せる、その苦心の慘憺たるは尙くも血性を有するものをして、奮つて君が爲に一臂の力を致さんことを思はしむるに足るものあり。余の如きも自ら揣らず、發起者の末斑に加はり、竊に其萬一を裨補はんとを期するものなり。而して余が之を贊成する理由は、概ね左の如し。

- 一、高層氣象の觀測は、諸科の學藝に裨益少からざるのみならず、延めて、人生の幸福を増進すべし、これ歐米各國に於て概ねこれが設備ある所以なり。
- 二、富士山は東海に聳立し、其高さ一萬二千尺に餘

富士山頂之圖



一、八面玲瓏、眼界極めて廣遠にして、實に天然の觀象臺と謂ふべし。

二、富士山は日本の名山にして、其名世界に知られ、我が皇室と共に、長へに此國の特相を代表するの實あるを以て、此山巔に建つる觀象臺は、須らく世界に有數なるものとなり、建築並に設備を完全にして國光を發揚すべし。

三、富士山は古來、雄大、高潔、又は美麗の摸範

として、或は詩歌文章に誦詠し、若くは繪畫美術に描寫せられ、爲めに邦人の氣象を醇化し、品性を高尚にせしと少からざるべし、故に今此山巔に人工を施さんとせば、宜しく國民の衆力を蒐め、更に一層の美觀を添へ、以て此名山の高徳に報ゆる所なかるべからず。

五、我邦の名山大岳は、大概人跡の至らざる所なく、毎歲夏期に至れば、登山者踵を接し、絡繹として斷ゆるとなく、或は一山にして、其數方を以て算するものあり、身軀の練磨上より見るも、精神の修養上より看るも、これ誠に一種の美風にして、吾人は益々此習慣を養成せんとを希望す。殊に青年の男女をして、四周の海洋に航遊せしむると共に、亦山岳を跋渉するの習慣を養成せしむるは、教育上最も有益と認むる所なり。然れども從來の登山者は、多くは唯神社、佛閣を拜し、若くは風光を賞するに過ぎざるを以て、將來は成るべく學術研究の如

き一層高尚なる趣味を旅客に解得せしむるを可とす。故に先づ富士の山巔に觀測所を設け、併せて其山腹にも、山麓にも適宜の設備を爲し、以て登山者をして有益にして且つ興味ある觀察を爲さしめ、此名山を一變して、日本の一大公園たらしめ、獨り内地の人のみならず、廣く萬國の人士を誘致するは、これ實に明治昭代の最大快事ならずや。

右の數項は、吾人が富士山の絶頂に觀象臺を建設するより生すべき利益中に算入すべきものと認め、而して其建設を希望する所以のものなり。此文を讀む者は、必らず多少吾人と同様の感想を抱くものあらん、請ふ奮て此事業を賛成せよ、學術のために其性命を犠牲とせる野中至君の壮志を翼賛せよ、讀者知らずや、曾て野中君が嚴冬山上に越年せんとせし時、其令妻千代子が遙に其愛兒を郷里に托し、風雪を冒し、否な生命を賭して、其人の艱苦を一萬二千餘尺の山巔に分ちたる、其貞操、其義膽を知らずや、之を聽く者誰か憤發興起せざ

るものあらんや、余輩請ふ今左に野中君夫妻が此事業のために盡瘁苦心せるその實歴の一斑を開陳せん。

野中君の經營

野中君が高層氣象の觀測に志ざせしは、明治二十年にして、爾來歐米各國の高山觀象臺（卷末に参照として其所在、比較を掲ぐ）の組織、構造、越年の方法、等を調査し、或は中央氣象臺を參觀し、或は經費其他のため種々苦心せしが、心算粗成りしを以て、二十七年十一月の氣象集誌に其志望を發表し、次て廿八年一月及び二月、觀測所の位置を撰定せんため、且つは山嶺の積雪の状況を視察せんため、君は猛然氷雪を冒し



野中君當時の山景

て登山を企て、第二回目に辛ふして其目的を達するとを得たり。當時の氣象集誌に掲げたる第一回紀行中に左の一節あり（要旨を抄録す以下倣之）。

鋭く尖れり。試みに氷の一片を碎きて口に入るれば、唇は恰も吸寄せらるゝが如く、附着して離れず、遽か

午前五時三合目の手前
に達す、寒暖計を見る
に氷點下八度なり。暫
く休息して夜の明るを
待つ。試みに懷中の切
餅を取り出せしに、乾
固して食ふべからず、
食麵麩も同じく固くし
て味なし。此邊より上
は積雪益々凝固り、表
面は全く硝子の如く、
氷の縁は悉く刃の如く

に之を引離すに、氷の兩面に血痕を印せり。此邊より傾斜俄かに甚しきが故、毛履の上に釘底の履を穿き、長柄の鳶口を打込み、兩足を交々踏しめては、鳶口を打かへ歩を進めたり

若し一步を誤らんには、忽ち滑りて氷なき所までは止まりがたき俣あるをもて、眞に薄氷を踏み、深淵に臨むの思をなせり。

×××××普らくして日出づ、日光の氷面に映する有様は、恰も研すましたる幾萬の刃物を羅列たるが如く、燦爛として眼を向くべき様なし。×××××鳶口も靴も損じて用をなさぬ故、午前十時頃下山せんと戦々兢兢々ど匍匐つゝ、四合目を過ぎしとき、如何にしけん足を



野 中 野
山下 山 當 時
代 千
子 (親 狀 の)

踏みはづして、四五丁許り滑りしが、幸に三合目の室に衝き當りて止まりたり云々。

又第二回目の紀行中に記して曰く、

顧みれば、太郎坊邊は一帶の雲柵引き、降雨あるものゝ如し。一合目邊より此邊迄、積雪の上を掠めて吹下す風は、時々小粒の雪塊を飛ばす、其狀恰も吹雪に異ならず、此時は氣息奄々たるのみならず、面を打ち劈くかと思はれたり云々。

かくて又氏は同年五月觀測所建築の調査のため登山し、次て七月工事に着手のため山麓に出張し、同月中旬旬静岡縣廳の認可を得て、山嶽劍峯を借用し、同月下

旬大雨を冒して木材運送の便否を調査せんために登山し、且つ劍峯の最高點に觀測所の標柱を建てたり。次に建前の準備成たるを以て、八月十二日石工、人夫、二十餘名を引連れて登りしより、爾後種々の艱難を犯して、一切の材料を運送し了はりたれば、氏は豫めて手傳のために山麓に來り居りたる令妻に諸般の處務を委せ、己れは工事監督のために登山したり。かくて氏は建築に着手せしに、風雨のため、若くは寒暑のため、工人等と共に非常の困難に會ひ、殆んど生命を危くしたる事、又は令妻が手透をうかいひ、團子を剛力に脊負はせ、三合目迄來りたる事、或は神官並に山麓の有志者等が祝意を表し、又は工事を助けたる事どもは、當時氏が東京の雙親に送りたる信書中に詳なり。

氏が當時の目的は、先づ兎に角山嶺に越年して、他日のために經驗を得んとするにありしが、九月廿日中央氣象臺より



野中氏私設測候所

氣象の觀測を囑托せられしを以て、和田技師等と共に登山して、器械を据へ付けたり。かくて下山の後ち、氏は八ヶ月分の薪炭買入れのため、須山村に越きたり。さて觀測所の建築も成りたれば、令妻は良人の命に由り、令兒を伴ひて歸京の途に就かれしが、既に心中に決する所やありけん、御殿場停車場より一封を東京の舅姑に送りて、其所思を告げ、己れは直ちに筑前福岡の實家に赴き、之に令兒を托し、單身歸り來りて、良人と共に越年の艱苦を共にするとはなれり。嗚呼美なる哉令妻の此振舞、實に此良人ありて此妻女あり、豈に偶然ならんや、聞く令妻の此決心は、野中氏も後に至つて知りたるなりと。又人々の此事を聽くに當りてや、百方抑止せしも、令妻は斷乎として當初の決心を遂行したるなりと。嗚呼何そ義に勇むの心の烈なるや、實に女丈夫と謂ふべし。

山上越年の實驗

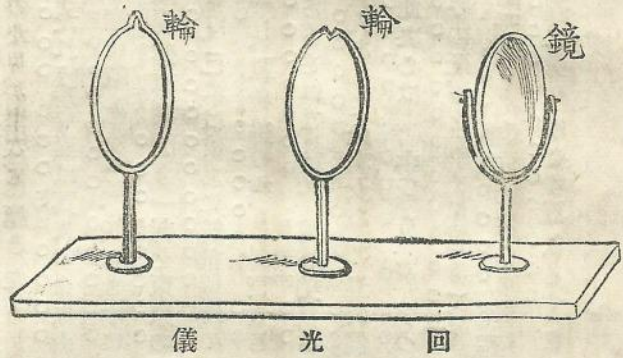
却て説く、野中氏は薪炭の外、無人礮、確の地にあり

て、單身八ヶ月を支ふるに足るべき、被服、食料の準備は更なり、之れが運搬のために無智の人夫等、數十名を相手に、或は風雨を冒し、寒氣と戦ひ、又は東西に奔走し、前後登山すると數十回にして、遂に万擲の準備整ひければ、愈九月三十日知友、家人、及山麓の有志者等に送られ、單身越年の登山をなしたり。かくて觀測所に着するや、直に器械を整へ、其夜半十月一日より觀測を始めたなり。其當時氏が嘗めたる苦難は、氏の手記に詳なれど、紙數の増さんとを恐れ、遺憾ながら左に其大要を畧記するに止むべし。

××××荷物狹室に散亂するも、觀象に忙はしくして、急に整理する能はず、炊事を爲す暇もなく、僅に鐘語を嚙りて飢を凌ぎ、又寒氣意外に強きも、器具散亂して、寢具を伸ぶべき餘地なく、遂に十二三日間は、征衣の儘晝夜草鞋を解かず、勇を鼓し、氣を勵まし、晝夜ろく／＼睡らず、或は夜中寒風を冒して、屋後の氷山に攀ち登り、鐵槌を以て器械に附着せる氷

雪を打こはす等、千苔萬艱に試みられつゝありしに、
 圖らずも妻登山し來りたれば、専ら觀測に従事し、
 稍勞苦を緩むるを得たり云々。

斯くて十月下旬には温
 度著しく降り、寒氣亦
 凜烈となり、且つ風力益、
 強くなりたれば一々戶外
 に出で、回光儀を取扱
 ふと能はざるに至れり、
 此回光儀とは、富士の絶
 頂高さ一万二千五百八十
 尺、四方五十里を眺、瞰す
 べき高處に据へ付けて、
 沼津測候所との通信に供
 したるものなり。十月の末千鳥の報効義會員松井、女
 鹿の二氏、郡司氏の厚意を齎らして來訪し、山頂懐愴



の光景を見て大に驚き、千鳥の比にあらざと言へりど
 いふ。當時二氏の去るに臨み、令妻千代子は郡司氏に
 まるらせむとて、一首の歌をかきつく、

わが爲にはる／＼とはせ玉ひつる

心あもへばなみだのみして

至氏もまた二氏のために

我邦の北のしづめとなりぬべき

増荒たけ雄の身を守れ神

氏等夫妻は艱苦の中にもかく厚意の訪問に心を慰め
 つゝ、十月十一月と過ごし、寒氣の次第に募るは勿論、
 風力非常に強く、寧日とては一日もなかりしが、諸事既
 に整理したれば、折々は郷里の事など思ひ出たるとあ
 りどなん、實に理りといふべし。氏の手記に左の一節
 あり、當時夫妻兩君の胸中左こそと思ひやられて、涙
 の袖を濕ほすを覺えざるなり。
 ×××××諸般の事、稍整備して、幾分安堵の思ひ
 をなし、室内に閉居するに至るや、余等が意氣豪なら

ざる故か、將た人情の免れざる所ならんか、×××
××夜半觀測の間合などには、暖爐に向ひながら、舊
里に預け置きたる三才の小兒が事など、始めて思ひ
起せしともありたり云々。

落合直文氏の物せる「たかねの雪」に左の一節あり。

十一月三日、けふは天皇の御祝ひ日なり、朝日の影う
るはしく窓よりさしこみて、空のけしきも常には似
ず、二人はどく起き出で、朝ぎよめなどして、××
×××至氏は、やがて日の丸の旗を×××風力臺
のもとに立てむとて、窓の戸こぢ放ちて、いざり出で
ぬ、×××風はげしくてえ立てず、今は力なく、
そをふどころに捲き入れ、二人はうやくしく跪き
て、×××御所の方を拜みまつりぬ、折しも雲む
らくど起り、にはかにはやて吹き立ち、勢すさまじ
く、×××岩か根もゆるぎわたり、×××かよわき女
の身いかでかこれにたへうべき、千代子は二三間が
ほど吹きとばされつ、×××辛うじて室の内にはひ

入りぬ。

×××二人は常に綿もて耳を塞ぎたれど、鼻の内口
のあたりはいづれも裂けやぶれて血を出すにいたれ
り、×××

此頃夫妻二氏は歌よみて、互に心をやりしともありし
となむ、今その二首をしるす。

至氏

うた人の眺めのみせしふじのねを

御代の光りとわれはなさなむ

千代子

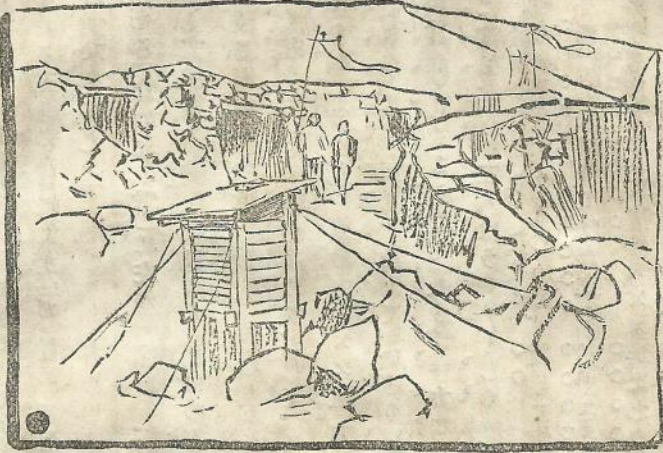
増荒をの身にはあらねど國のため

つくす心はいかでゆづらむ

さて爰に在獄中最も不幸なる事起れり、そは他事な
らず、兩君が交はるゝ病魔に侵されたるは是れなり。
令妻は十一月上旬より扁挑腺炎を患ひ熱氣昇り、咽喉
腫れ塞がり、湯水も通せずなれり、又此病氣の平癒す
るに引續き、全身腫れて殆んど別人の如くなれり、野中

氏は此時の事を記して曰く、

××××醫藥も用意したれど、斯る病に襲はれんとは思ひ寄らざる事なれば、僅に下劑を用ひなぞして、向回復を祈りしも、浮腫容易に減退せず、然るに如何せん之を平地に報するの道なく、左ればどて猛烈なる吹雪の中を下らんことは、到底一二人の力を



百葉函

もて爲し得べきに非ず、又之を下山せしめんとは、無論當人の本意に非らざるべしなど、獨り憂慮に沈みたりしが、固より無人の境なれば、或は斯計りの事あらんとは、兼て期したるとなりしにと思ひ返し、よし／＼方一運拙くして斃れなば、飲料用の水桶になりて死骸を入れ置くべし、など心に期したるありき。

氏はかく令妻の病のため斷腸の思をなせしが、細君の病漸く癒るや、氏も亦同病に悩まされ、十二月中旬は病の時なりしが、幸に足を引き摺りながら觀測丈は缺くとなかりしといふ。當時亦令妻の心中推し測られて憐なり。此頃氏の令弟某君と外五六の人々（先月中旬に風雪の爲に入合目より引返せし山麓の有志者）、又々訪問せんとせしが、吹雪激げしくして皆登り得ず、其中山麓の村長勝又氏と剛力熊吉なる者と兩人のみ、死物狂になりて轉げ返む如くにして觀測所まで來りたり。此時氏は病氣の事を他言せざる様、來訪の二人に誓ひ

置きたりぬる。

野中氏夫妻の下山

それより氏の病も漸く懈りしに、兩三日も経ば、床を離るゝを得べしと思ひ居たりしに、病氣の事何時しか其筋の耳にまで入りしと見え、全月廿一日和田技師、山麓の警察署長筑紫警部、等は屈強なる剛力を引卒して、一行十二人注意周到なる準備を爲して、迎の爲めに登山し、下山を勸めたり。氏は初め固く下山を否み、醫藥を得て尙ほ引續き在嶽せんとを請ひしも、和田技師初め懇々其非を説き、再擧の可なるを諭しければ、氏も止むなく遂に下山するとなれり。氏が當時の情況を手記せる其大畧は左の如し。

××××妻は既に全快し居りしが、余は猶ほ立つと能はざりしたため、兩人とも剛力に負はれ、他に三四人の剛力前後を擁護し、吹雪に吹き倒されぬ様深く注意しつゝ下れり。余は登山以來非常に身心を勞し、且つ病軀を氷點下三十度許りの吹雪に曝らし、殊に

浮腫せる胸部を剛力の背部にて壓したれば、呼吸益々苦るしく、空を攫んで煩悶し、口中冷えて舌動かず、物云ふとも叶はず、氣力次第に弱わり、眼も見えずなりしかば、残念云はん方なく、寒風に向ひ切齒して眼を見張りしたため、兩眼朱の如くなり、傷み耐えがたく、加ふるに足は氷の上を引摺りしたため全く凍傷し、氣力次第に盡き果て、終に人事不省となりたり。

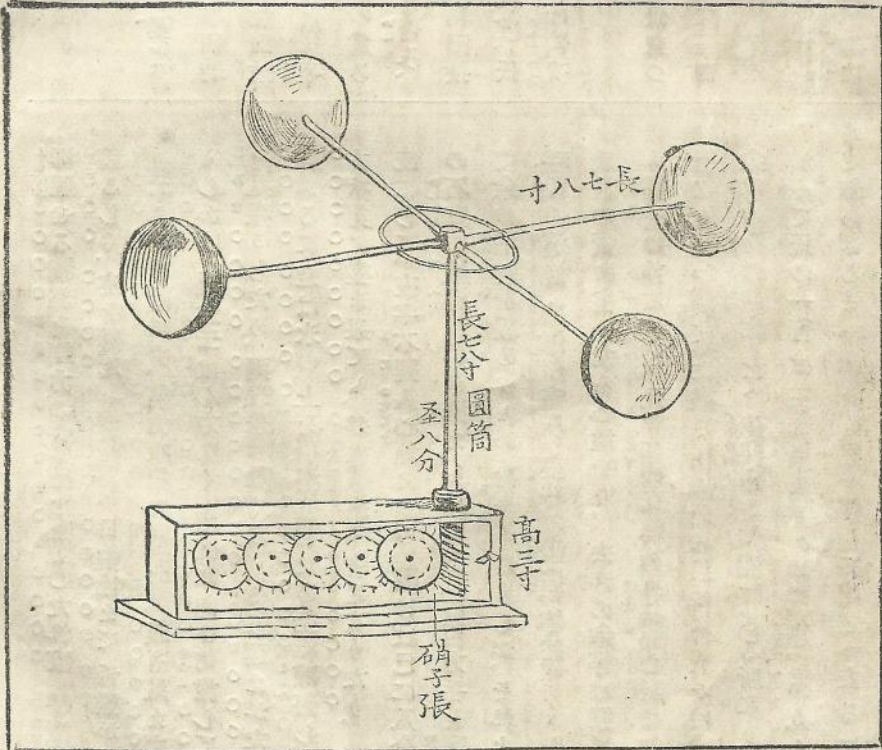
既にして、夜半不圖人心地に歸り、聽けば已に八合目の石室の爐邊に昇き据えられ、一行は百方手を盡して余の病軀を暖めつゝある最中なりしが、それより呼吸の逼迫、凍傷の痛み、眼球の激痛、等甚しく四苦八苦の責に會ひたる心地せり。去れど余等は原どより覺悟の前なれど、此際始終一行の骨折心配は如何計なりしか、秃筆に盡されず。此一行の人々は實に余等の命の親にして、生涯忘るゝ能はざる所なり。かくて氏の一行は三合目迄降りしに、遠近の人々知ると知らざると、前夜より雪を侵して出迎へたるに遭

ひ、二合目より山駕籠に乗りかへ、山麓なる佐藤氏の宅に着するや、翌日帝國大學總長初め有志諸氏の總代として、三浦醫學博士、氏を見舞はれたりといふ。

以上は氏が高層觀測事業に志してより、苦心經營すると數年にして、遂に去ぬる明治二十八年の冬、登山越年を企て、病のために充分目的を達すると能はざりし、其始末を畧述したるものなり。さて氏は九死を出て、一生を保ち、東京に歸りて後ち、在獄中の狀況を氣象臺へ報告したり。其要項は富岳の地勢、觀測所の位置及其構造、觀測器、氣象、飲食料、燃料、被服、等の件なり。摘記して讀者の一覽に供へたきものあれど、今は全く之を省きたり。

富士觀象會の設立

扱て野中氏は前に陳べたる實地の經驗によ



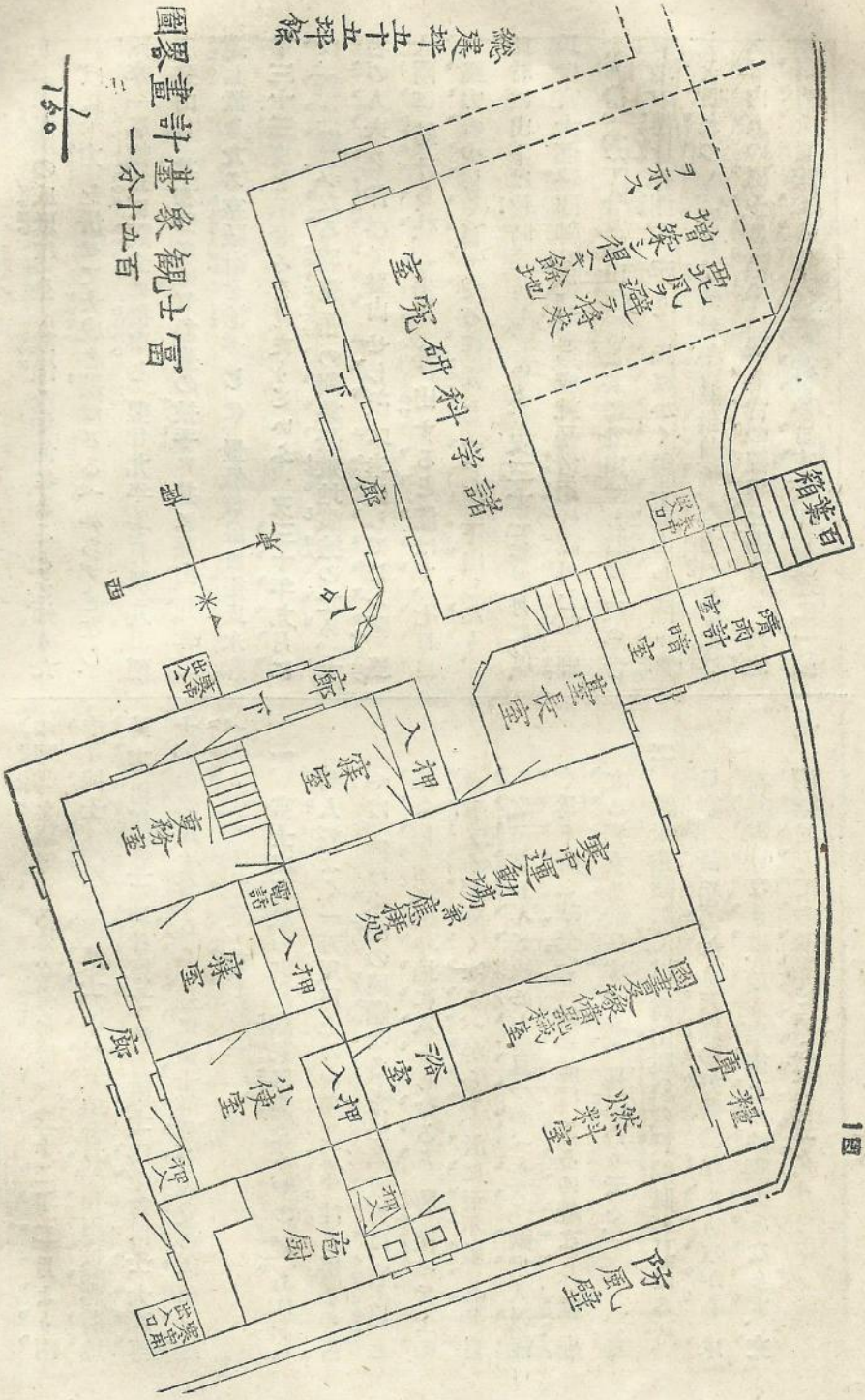
風力計

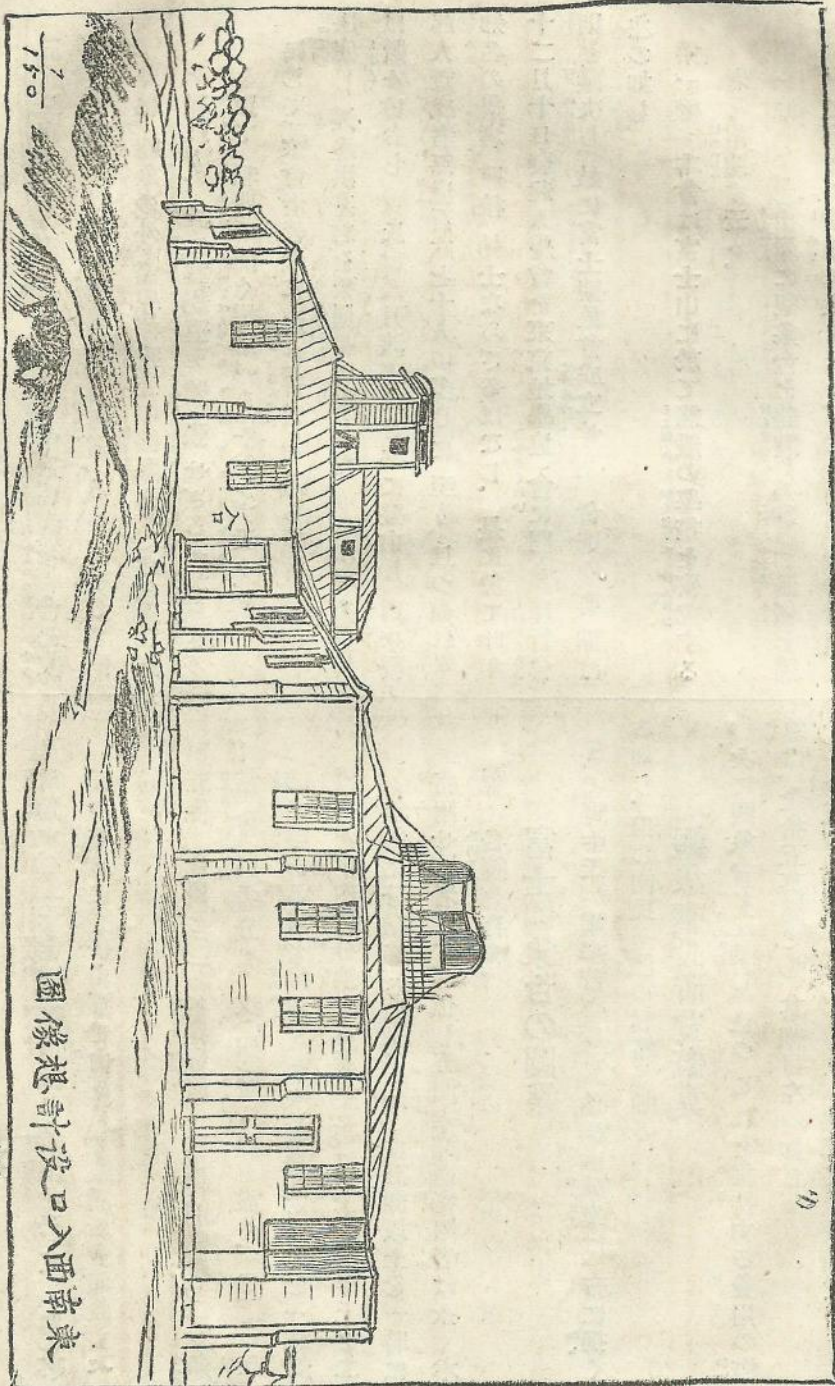
り、斯事業の成敗は、全く設備の如何にゐることを知りたれば、衆力を併せて大成を期せざるべからずとなし、爾來一層慎重に調査に従事し、翌廿九年七月及八月兩度登山し、其初回には氣象臺の援手と共に登山し、嘗て遣し置きたる寒暖計を檢べしに、最低氣温は攝氏氷點下三十三度を示せるを見たりといふ。又三十年九月には、新に撰みたる成就岳の觀象臺敷地試験のため、十名の入夫を伴ひて登山せしが、不幸にして日々強風大雨に妨げられ、一步も外出するに能はず、七日目に風力の少しく衰へたるに乗じ、空しく下山したり。此時は山下は快晴なりしといふ。又三十一年四月には、氏は富士郡淺間神社に行き、成就岳借用の認可を縣廳より得、全年八月黒田侯爵と共に登山せし時は、觀象臺敷地の熱量を測りたり。氏はかく毎年登山し、種々實驗を重ねつゝ、傍ら建築材料、其供給地、剛力の募集法、又は山上の風土に適する觀象臺の圖案を調査し、其他斯計畫を實施する方法に就き、日夜苦心し、遂に一個

の團躰を組織するの必要を感じ、三十二年二月より兩寺尾博士、深田法學博士、中村氣象台長、和田技師、菊地博士、山川博士、箕作博士、緒方博士、田中館博士、大森博士等の諸氏と會合し、茲に富士觀象會設立の志望を述べたり、其要項左の如し。

一、富士山觀象の事は國家事業たるやの疑われど、邦人がよく一萬尺以上の山頂に常住し得るや否やは、猶ほ未決の問題なるを以て、政府は官僚を任命して死生の地に入らしむると、將校の兵士に命令するが如くなるべからず、故に至不敏と雖、自ら之に當らんと決心し、且つ謂へらく、歐米人の能く爲す所、邦人之を爲す能はざるの理なし、軟弱なる婦女も滞在すべきの見込あり云々。

二、歐米諸國にては、高山觀象の設備概ね具はるも、日本は富岳の如き天然の好觀測地ありながら、未だ其設けなきは、獨り學術上の缺點のみならず、文明國としての缺點と云ふべし云々。





東南面入口設計想像圖

三、至寒中在岳の經驗により、山頂に觀象台を設

置するの、學術上必要且つ急務たるを感ずると同
時に、觀象の外、諸學術研究の機關を供ふるの利益
を覺れり。故に其規模を擴張せざるべからざる
を以て、私費の能く辨ずべきにあらざ云々。

にして、來會者皆大に之を賛成し、乃ち趣旨、會則を
決定し、渡邊洪基君を委員長に推したり。次て委員等
は數々會合し、又氏は八月渡邊氏と共に登山し、爾來發
起人賛成者無慮百六七十人の多きに至り、且つ何れも
知名の學者、將校、紳士ならざるはなし。是に於て昨年
十二月十日發起人總會を東京地學協會に開き、趣旨會
則を議決し、茲に富士觀象會成立せり。會則の要點は
左の如し。

第一條 本會は富士山に於て諸般の學術を研究する
者を幫助す云々。

第三條 (一)山嶺に觀象台を建設し、書籍、器械を備
へて學者の使用に供す云々。(二)觀象台に台員を

常置す。(三)電話、電信、等を設備す云々。(四)事
業の進歩に隨ひ山腹と山麓にも觀測所を建設すべ
し。

第五條 會員を(一)名譽會員、(二)特別會員、(三)通
常會員に分ち、又(四)賛成員を設く。(一)は學
識名望ある者を推舉す、(二)は百圓以上を一時又
は一ヶ年内に分納する者、(三)は二十圓以上を二
ヶ年内に分納するもの、(四)は五圓以上を一時に
寄附せし者とす。但し五圓未満の寄附者は永く本
會に名籍を存す。

富士觀象台の圖案

さて野中氏が爾來苦心して作れる圖案は、右に掲ぐ
る如し。但し同氏一己の私案と知るべし

觀象臺設置費概算

次に觀象台を建築し、且つこれを維持する費用の概
算は、金拾五萬圓とし、其細目左の如し。
一金五萬圓 建築其他設備費

内譯

一金貳万圓

一金壹万五千圓

一金五千圓

一金三千圓

一金貳千圓

一金五千圓

建築費

電話線架設費

儀器購入費

書籍器具費

雜費

豫備費

一金拾万圓

維持基本金

此基本金より年々生ずる利子を六千圓と假定し、其六千圓の費途左の如し

一金六千圓

觀象臺一ヶ年經常費

内譯

一金貳千八百圓

一金貳千貳百圓

一金壹千圓

觀象臺職員手當

食料、燃料、雜費、修繕費、等

豫備金

歐米諸國の高山觀象台

さて歐米諸文明國に於ては、高層觀象のために如何なる設備を爲せるや、今參照のために其重要なる觀象臺の所在地を擧ぐれば左の如し。

南米エル、ミステー山一萬九千尺

(富士山よりも高きと凡七千尺)

佛國モン、ブラン山一萬六千尺

(富士山より高きと四千尺)

富士山の占むべき位置

埃國ゾンブリック山一萬尺(甲州駒ヶ岳に同じ)

佛國ピック、デニ、ミデー山九千尺(加州白山に同じ)

魯國コイラムスク山八千尺(信州淺間山に同じ)

英領印度ダールリック山七千尺

(信州白根山に同じ)

北米マウント、ワシントン山六千尺

(野州赤城山に同じ)

英國ペンチピス山五千尺(相州丹澤山に同じ)

先づ大要此の如し、而して此等の觀測所も未だ能く數年間續きて觀測せしもの、甚稀なるよしなれば、願はくは我國をして高層觀象事業完成の名譽を博せしめんと、希望に堪えざるなり。

天下の有志者に望む

以上記する所を讀み玉ひて、江湖の諸彦富士觀象臺の設けざるべからざる所以を解し、且つ野中至氏の、身を挺して學術界のため、又國家の躰面のため、敢て前人の未だ試みざる難局に立んとするの至誠を感じ玉はんには、學術と國家に關する直接の必要及び利益上より、且つ個人と社會に關する當然の情誼又義務上より、願はくは同氏の精神に協ふに足るべき物質を供給して、同氏を補助し、富士觀象臺を成就せしめられんとを、吾人は希望して止まざるなり。而して世の有志諸君が幸に此事業のために物品又は金圓を寄附せられんとするときは、其多少は敢て問ふ所にあらず、五錢可なり、十錢可なり、一圓、十圓更に可なり、百圓、千圓、万圓尙更に可なり。且つ斯事業は成るべく衆力を集めて成就せんとを望むが故、若し、學校、軍隊、敎會、寺院、會社、工場、官衙、等の如きは、適宜其寄附金品を取りまどめ

て、送附せられんとを希望するなり。(金三圓以内は三錢郵便切手代用苦しからず)。又寄贈金品は東京小石川原町五十五番地富士觀象臺事務所宛に送付あらんとを請ふ。



伯 爵	理學士	理學博士	侯 爵	限 本	男 爵	九 鬼	陸 原	久 躬	野 中	野 口	野 村	上 田	村 山	村 岡	難 波	工學博士	理學博士	中 川	中 村	頭 本	辻 新
松 方	安 廣	山 上	山 川	山 縣	限 本	九 鬼	陸 原	久 躬	野 中	野 口	野 村	上 田	村 山	村 岡	難 波	工學博士	理學博士	中 川	中 村	頭 本	辻 新
正 義	胖 一	萬 次	健 次	有 朋	有 尙	隆 一	實 弦	至 與	精 年	龍 平	範 爲	正 元	半 太	元 正	元 正	元 正	元 正	元 正	元 正	元 正	元 正

法學博士	理學博士	子 爵	理學博士	醫學博士	醫學博士	醫學博士	醫學博士	醫學博士	醫學博士	醫學博士	醫學博士	醫學博士	醫學博士	醫學博士	醫學博士	醫學博士	醫學博士	醫學博士	醫學博士	醫學博士	醫學博士
寺 尾	寺 尾	寺 內	榎 本	近 藤	小 松	小 藤	小 金	後 藤	藤 岡	藤 井	深 野	古 市	福 岡	松 島	正 戶	松 田	松 岡	松 村	松 本	松 井	松 井
亨	壽	毅	武 揚	久 次	英 太	文 次	良 精	知 太	助 三	總 一	威 三	悌 剛	剛	剛	剛	剛	剛	剛	剛	剛	剛

理學博士	醫學博士	醫學博士	醫學博士	醫學博士	醫學博士	醫學博士	醫學博士	醫學博士	醫學博士	醫學博士	醫學博士	醫學博士	醫學博士	醫學博士	醫學博士	醫學博士	醫學博士	醫學博士	醫學博士	醫學博士	醫學博士
清 浦	菊 池	木 下	木 下	北 尾	北 里	佐 藤	紳 順	佐 藤	佐 藤	櫻 井	澤 柳	坂 田	櫻 井	西 園	西 園	青 山	朝 比	赤 松	青 木	寺 田	寺 田
奎 吾	大 麓	政 中	廣 次	柴 三	柴 三	昌 介	次 郎	傳 藏	友 房	省 三	政 太	貞 一	銳 二	望 公	望 公	胤 通	知 泉	則 良	周 藏	田 榮	田 榮

法學士	法學士	男 爵	法學士	伯 爵	理學博士	理學博士	理學博士	理學博士	理學博士	理學博士	理學博士	理學博士	理學博士	理學博士	理學博士	理學博士	理學博士	理學博士	理學博士	理學博士	文學士
末 永	末 延	杉 浦	鈴 木	關 新	千 家	元 田	東 久	平 山	平 賀	平 山	柴 山	島 田	三 守	三 島	三 宅	三 浦	三 好	笑 作	水 野	肝 付	菊 池
純 一	道 成	重 剛	充 美	吾 福	尊 福	通 禮	信 美	義 美	藤 次	矢 八	三 郎	三 郎	三 郎	三 郎	三 郎	三 郎	三 郎	三 郎	三 郎	三 郎	三 郎

明治三十三年二月廿五日印刷
 明治三十三年二月廿八日發行

東京市赤坂區青山南町三丁目五十三番地
 東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地
 東京市牛込區市ヶ谷
 東京市日本橋區通四丁目

編輯兼發行者
 印刷所
 發行所
 株式會社
 秀英舍第一工場
 松島
 久間
 衛
 治剛